

東日本の地方国公立大学の経営効率性 ー東北公益文科大学との比較ー

鈴木 隆也

本論文は、少子化の進行や地域間格差の拡大により、日本の高等教育機関、特に地方に立地する国立大学・公立大学が厳しい運営環境に置かれているという背景を踏まえ、大学が限られた資源の中でどの程度効率的に教育・運営を行っているのかということの問題意識とした。こうした状況の下で、本研究は、国立大学および公立大学を対象として、大学の教育面および運営面における効率性について分析し、その特徴を明らかにすることを目的とする。

この目的を達成するために、本研究では大学および文部科学省等が公表する大学関連統計データを用いて、学部のみを対象とした東日本の国立大学および公立大学を分析対象とした。分析手法としては、複数の投入要素と産出要素を同時に評価することができる、データ包絡分析（DEA）を用いて、教育モデルおよび財政・運営モデルを構築し、各大学の相対的な効率性を測定した。

分析の結果、大学間で効率性には大きな差が存在することが明らかとなった。特に、教育成果や学生規模に対して投入資源が相対的に抑えられている大学は高い効率値を示す一方で、教職員数や総経費が多い大学では効率性が低くなる傾向が確認された。また、国立大学と公立大学の間にも効率性の構造的な違いが明らかとなった。

以上の結果から、大学運営においては単なる資源投入の拡大ではなく、教育成果や学生数とのバランスを意識した資源配分が重要であるという結論となった。今後の大学運営には、教育の質を維持しつつ、投入資源の適正化と成果の最大化を両立させる取り組みが求められる。